

「ノープロブレム～アフリカでの日々」

ゲスト：吉國元（美術家）

吉國 2年前に銀座でMariさんの個展が開かれたとき、町田市立国際版画美術館の友人の学芸員から行った方がいいと連絡をいただいて。その日は仕事で銀座まで行くのは難しいと思っていたら、岡村さんから連絡をいただいて、同じ日に2人から行った方がいいと言われるなら行かなきゃと思って、仕事を終えて電車に乗って銀座へ向かったんです。最初の印象は、フォーマットがすべて正方形で、色は赤、白、黒、青と限定され、扱っている内容はキスムの出来事というように非常にミニマムで洗練されていますよね。アフリカの経験ということで自分も共感することが多く、心を奪われました。まずは彫り進み版木の技法について説明していただけますか。

Endo 普通の多色刷り木版画は、色ごとに使う版が違うので、3色使う場合は3版必要になるんです。彫り進み版画は版木が1枚。そこがいちばん特徴。最初は白くしたいところだけ削るんです。次に、最初に使う色は赤なんですけど、版木全体にローラーで赤インクをのばす。そして紙の上にバレンで刷るわけです。それから版木についた赤インクをサラダオイルで全部拭うんです。そして赤くしたいところだけを彫る。次に版木に乗せるインクの色は青。さっき赤で刷った紙に、青のインクを乗せた版木を重ねる。すると赤と白と青の絵が出るんですが、その段階では作者しか絵柄がわからないんです。最後に青く残したいところを削って、黒のインクを版木にローラーで乗せて、紙に重ねると完成。3色使うけど1枚の版木で用が足せるんです。

吉國 赤、青、黒の3色に限定したのはなぜですか。

Endo 日本で使われ出した色が朱と藍色、墨なんですね。私のアフリカ生活は、最初はナイロビでしたが、村に移ってから本当にカルチャーショックが大きくて、本当のアフリカ生活は村だと思っているので、日本で使われた初めての色と、初めてのアフリカ生活を重ね合わせています。

吉國 この版画技術は1回彫ったら戻れない。そして全部刷り終わったらもう刷れない。いくらでも複製できるものとは違う緊張感があると思いました。作家の思想や哲学は、素材や技法に集約されると僕は考えているんです。後戻りのできない1回性にMariさんの思想や哲学がある。素材と技法がイメージや色と一致して、鑑賞者に開かれている作品だと感じます。あえて色彩について聞いたのは、いわゆるアフリカ人を描くとき、ポイントとなるのは肌の色ですね。僕がMariさんの作品を観たとき、ちょうど『美術手帖』で「ブラックアート」の特集が組まれていて、自分でも肌の色をどう描くか自問自答していたんですが、Mariさんの作品はいわゆる「黒人」と呼ばれる人の肌が固有色で描かれていないことが、素晴らしいと思いました。

Endo 肌の色に関しては意識しました。黒くしなくてもアフリカ人に見えるように考えたつもりです。一時、「肌色を考える会」の代表をやっていたことがあって。もともと「肌色」という名称に抵抗があったんですが、日本で子どもを育てていて、娘がクレヨンで絵を描くとき、「私はこの肌の色ではない」と言ったことに愕然として。何とかしないといけないと思いまして、5～6社の文房具会社に手紙を書いたりして、1998年頃でしたか、そのうち1社から「肌色」が「パールオレンジ」になったということを聞いて安心したんです。

吉國 意志をもって肌の色を表現しているのが、よくわかりました。私もNANAWATAで個展をしたとき、家政婦の女性がアイロンをかけている100号の絵を展示しました。女性の後ろにいる子どもは自画像のつもりで描きました。女性の肌は褐色で描きましたが、自分の肌の色を描き分けることに違和感を覚えて、赤い色で描いたんです。その姿が、Mariさんの版画に出てくる子どもに似ているので共感したんです。それから垣根に洗濯物を並べて干している絵がありますが、僕もアフリカの原風景として洗濯は非常に印象に残っています。

Endo みんな膝を曲げないで、頭をさげて作業をするんですね。洗濯だけでなく、草むしりもみんなこういう体勢です。膝が曲がらないんですって。私は頭に血が上っちゃうんで膝を曲げて洗濯していたんですけど、義理の母からは、膝を曲げないでやりなさいって言われました。できませんでした。

吉國 文章では「女性は洗濯をしていた」と一文で済まされることが、絵を描くと、どういうふうに洗濯をしていたのか、どういうポイントがMariさんにとって印象的だったのか、というのが描かれますよね。

Endo 村には水道が通っていませんから、バケツを持って水を汲みに行くんですけど、縁のすれすれまで水を入れないといけない、それを頭に乗せないといけない、歩いて家まで運ばないといけない。それができるのが良い嫁だと義理の母から言われて。私はバケツを頭の上に乗せるまでに水がこぼれる。でもアフリカの方たちはこぼさないで頭の上まで持ち上げて、歩けるんですね。私は結局、良い嫁ではなかったんです。

吉國 インタビューで「何でも問題ないって言うんですよ、問題すごくあるのに」と話していますが、「問題ない」というのは反語で、たいへんな出来事はたくさんあったと想像しています。私の母は1981年から15年間ジンバブウェで暮らして、そのあいだに僕と妹が生まれているんですが、『アフリカ人の悪口』という本のあとがきに「だまされた、盗まれた、約束を破られた、お金は返してくれなかった、車をぶつけられた、高い修理代を支払った……裁判で敗訴した」と散々な目に遭ったことを書いているんです。それでも「生活苦と闘う同胞としての情を通わせている」と。そうした愛おしさはMariさんと共通していると思います。心配ごとや不安があるときに「問題ない」と言われて救われることもあったと思いますが。

Endo 本当に問題だらけですよ。インフラも、何もかも整わないと言って過言でないんですが、よく考えると、そんなことがあっても食べられるし、家はあるし、アフリカの人たちの白い歯の笑顔を見たら、忘れられるんですね。問題ではなくなってくるんです、自分のなかで。日本にいと間違いが許されないので結構きついんですけど、向こうに行きますと、そのくらいのことはって流せるんですね。彼らから、何が問題なのって聞かれたときに、ああ何が問題なんだろうと自分で思って、気持ちがスッとする。単純な考えになってくるんですよ。そこに行くまでは修行で、紆余曲折ありましたけど。

吉國「ある日のこと」に記録された女性たちの仕事・仕種は、買いもの、お茶をする、水汲み、編みもの、行水、山羊を飼う、牛を飼う（放牧）、料理、食事の提供、なまずを釣る、買いものを頼む、鶏を絞めて料理する（長男の嫁の仕事）、洗濯（膝を曲げないで）、草むしりなど。一方で男性たちの仕事・仕種は、のんびり自転車を漕いで帰る、庭の案内、鶏に餌をあげる、子どもの髪をとかす、茅葺き屋根のてっぺんを塞ぐなど。当然、Mariさんの置かれている立場で見えるものが変わってくるわけですが、女性たちの仕事が男性たちの仕事より身近にあったと想像できます。なぜ最初の作品が買いものだったのか、女性の仕事を意識的に記録したのかということをお聞きしたいです。

Endo いまだにどうしてこの作品が1番になったのかはわからないんですけど、コロナのときに、ケニアは厳しい条例がたくさん出たんですね。ずっと家にいて、なぜかキスムの村の情景が頭に浮かんで、これは何とかしないといけないと思って。

吉國 身近な方が亡くなったと聞きました。

Endo 今住んでいる家の隣の方が急に亡くなられてショックが大きかったんです。自分がコロナで明日死ぬんじゃないかと恐怖感があって、生きているうちに何とかしないといけない。自分が得意なのは版画なので、版画で残そうと思ったんですけど、4歳か5歳の義理の妹のフローレンスがママに言われたとおり市場でトマトを買ってきたときの情景が印象的で頭から離れなかったんです。これを刷り出してからは、いろんな情景が浮かんできて。頭のなかに浮かんできたものを版画にしたのがほとんどです。写真をもとに版画にしたものもあります。

吉國 コロナを機に、暮らしの断片を彫った作品が生まれたのですね。ほかに印象的な記憶はありますか。

Endo 叱られてばかりいたんです、私はね。外で雨を見ているのが好きなんですけれども、雨が降ったらすぐに家のなかに入りなさい、そうしないとマラリアになるよと叱られて。私たちが考えるマラリアだけでなく、風邪のこともマラリアと言うので、風邪をひくよ、という感じで、病気になってはいけないので家に入りなさい、と。それからトイレに入ったらヘビがいたんですが、叫び声をあげると日本人は弱虫と思われるので、ヘビがいたけど大丈夫だった、と言ったらまたそこで叱られて。勇敢だったと褒めてほしかったんですけど、反対にそんな危険なことをしてはいけないと叱られました。

吉國 いわゆる「嫁」として「家」に尽くされたわけですが、義母の存在はどうでしたか。

Endo 結婚は両家からずっと反対されていたんですけど、嫁いだら日本人も何も関係なく真剣に嫁として扱ってくれました。それはとても嬉しいことでした。

吉國 アクセサリーの作品は、とても印象的でした。

Endo 結婚する前に主人の実家を訪問して、両親や妹、弟たちが待っていてくれたんですけど、挨拶が終わってちょっと荷物から離れた途端に、妹たちは私のバッグを開けて、アクセサリーを身につけていたんですね。本当にそのときはシクシク泣いたんです。でも良いように解釈すれば、初日から家族として迎え入れてくれたと、後から思っ

吉國 ある種の通過儀礼的なものという解釈。

Endo とにかく家族のものですから。あなたのものは私のもの。境界線がないんですね。Mariは家族だから自分たちも使っていだろうと思っ

それがいちばんのカルチャーショック。

吉國 それを受け入れるのに時間がかかったんですか。

Endo ちょっと時間がかかりました。かかりますよね。

吉國 自分はジンバブウェで、母親が子ども服のフリーマーケットを庭でやって、近所の子どもたちが来て、僕や妹が着古した服を安価で買うんです。そうすると徐々に、かつて自分が着ていた服を着ている子どもたちが増えていくんですね。僕はそれが嬉しかったし、楽しかった。ご本人は深刻で辛かったと思いますけど、自分が持っていたものを人が持つというのはなかなか素敵

な情景だと思いました。Mariさんが置かれている立場によって、女性の仕事が目につくという点は

Endo 私は何も意識せずに頭に浮かんだものを刷っていっただけなので、そう指摘されて驚いたんです。

吉國 調理をしている作品や放牧をしている作品がありますね。

Endo 家で飼っていた山羊をママが面倒見ているところ

吉國 実際に10匹も飼っていた。

Endo 10匹かどうかはちょっと……10匹ってふちがみとふなとさんが歌ってくださったので、意識して（笑）

吉國 歌に引っぱられてというのもあるんですね。

Endo そうです、そうです。

吉國 男たちの仕種はいかがですか。のんびり自転車を漕いで帰るとい

Endo このおじさんは仕事帰りです。いつも家の前を、あんなにゆっくり自転車が漕げるのかというスピードで（笑）。どこから来てどこへ行くのかもわからない。通るだけなんです

吉國 もうひとつ印象的なのが鶏に餌を撒いている作品です。僕もジンバブウェで鶏を飼っていたので、鶏の声や匂いで朝がはじまっていくアフリカの情景が思い浮かんでくるんです。この人は慈しむような佇まいで、顔つきがすごく優しく

Endo ジミーおじさんというんですけど、本当に優しい。義理の母のお兄さん。彼が鶏に餌をやっている様子は頭のなかにこびりついていて、絶対に記録しておこうと思ったんです。

吉國 これは男性の仕事ですか。

Endo 特に誰というのは決まってい

吉國 ジンバブウェとケニアは決して近いところではないんですけど、何となく服の着こなしに見覚えがあると思っ

Endo 吉國さんと初めてお会いして忘れられないのは、シャツの曲がり具合とか、X脚とか、アフリカの方特有ですよと言

われて。アフリカの方を知らない

吉國 僕も描いたことがあるのですが、日常の白いシャツを着ている感じが本当に素敵だと思いました。子どもたちの仕種や遊びについても聞きたいのですが、犬のシンバの作品が2番目という早い段階で出てくるのも素敵だと思いました。それから木のぼりとか……土の上で大笑いする男の子も印象深い作品です。ベルトが紐であることが格好良

Endo ヴィクトリア湖畔にある有名なホテルのプールで、泳いでいる子たちは上流階級の子たちです。村の子どもたちは水たまりで泳いだり、池で泳いだりしていますけれども。

吉國 作品を分類して気づいたのは、葬儀とか弔いが非常に多い。レベッカばあちゃんに関する作品です

Endo お葬式の翌日の空は本当にきれいだったんです。赤と青のストライプが同じ幅で見事だったんです。

吉國 葬儀のシーンからはじまって、ある種の追憶かなと思っ

Endo レベッカばあちゃんは義理の母方のおばあちゃん

吉國 朗らかな日常のなかに、人が亡くなることが示唆されているからこそ、全体の印象が深まっていると思うんです。

Endo 葬儀のとき、見たことがない大きな蛾が止まっ

Endo 通夜では焚火の前で寝袋に入って寝ました。夜通し大音量の音楽が流れて。個人的に大音量のなかで寝るのは好きなん

Endo 羽蟻が飛んでいる作品も印象的

Endo 目的地があるわけではなくて、風に吹かれて漂うような儚い生き方をします

Endo これは彫ってないですね。1回白い部分を彫って、あとは版木の上に乗せる絵具を調整して刷っています。

Endo Mariさんの作品は、人との関わり

Endo 本当に言葉も習慣も違うんですけど、みなさん私を受け入れてくれたんですね。受け入れてくれるからこそ、私もあちらも受け入れられる、そういう関係であつたと思

Endo あの場所が自分の居場所であつたとMariさんが言えることが、非常に羨ましいと思

Endo ここで死ねるな、という、そういう場所です。ですから、将来的には村に戻ります。

（まとめ：岡村幸宣）